「子どもの誕生」再考（３）

―1960 年代里親委託実践にみる「子どものニード」と養護実践の相互昂進―

徳島大学　　土屋敦

1　目的

本報告では、1960 年代になされた里親委託実践を事例に、子ども論の中で論じられてきた子ども観の「誕生期」（1930 年代）から「普及期」「安定期」（1960 年代）を経て「ゆらぎの時代」（1980 年代）へ至るという従来図式を問い直すことを目的とする。その際に、同時期に人口に膾炙していく近代家族という規範や「子どものニード」概念が里親委託実践の中でどのように用いられ（Hacking 1996）、この時期の里親実践といかなるかたちで相互に影響しあいながら、里親委託実践が再編されていったのかを検証する。1960 年代初頭の社会的養護は、「戦後初期の混乱期」を脱し、新たな社会的養護のあり方が模索されていた時期に該当する。本報告では、特に 1961 年に発足した家庭養護推進協会の設立プロセスとその後の初期の活動の展開に焦点を当てる。従来、里親委託は子どもの家事手伝いや家業などの労働力目的で里親側のニーズに沿う形でなされることが多く見られた。そうした状況に抗する形で、同協会の運動は特に「子どものニード」を前面に押し出しながら、里親委託のあり方の再編を企図して開始された活動であった。

里親委託の歴史を描き出す既存研究の多くは、主に社会事業史、社会福祉学史分野において、そこで前提とされてきた近代家族規範をポジティブに評価するかたちで歴史が描かれてきた（松本 1985 他）。本報告では、そうした里親研究を批判的に再検討するとともに、里親委託の変遷・変容の中で参照され前提とされてきた家族規範を、批判的に分析・検証していく。

2　方法

本報告では、主に家庭養護推進協会発行の初期の刊行物、および『神戸新聞』（1962－95 年）の家庭欄に週 1 回掲載された里親探し関連記事を一次資料として用いる。前者は、同協会の初期の活動を対外的に最も簡潔に提示している資料群であり、後者は特に同協会初期の里親委託活動のあり方を分析する際に適当な資料である。

3　結果と結論

分析の結果，同協会の活動実践の中では「子どものニード」という概念を中心に里親委託のあり方全体が再編されるべであること。そして実親家庭から引き離されながら養育される子どもにみられる児童精神医学上の「発達の遅れ」を回避することを中心に里親委託実践の再編がなされたことが明らかになった。

以上から、近代家族という概念・規範は、1960 年代初頭という里親委託のあり方の再編期というタイミングで、特に「子どものニード」を中心概念に据える形で里親実践活動家に参照され、この時期の里親委託再編の指針としての役割を与えられることになったことが明らかにされた。

文献

Hacking,I ,1996, “The Looping Effects of Human Kinds” D.Sperber, D.Premack, and A.J.Premack eds *Causal Cognition*, Prinston University Press.

松本園子, 1985, 「社会的養護の方法としての里親制度の検討(1)」『淑徳短期大学研究紀要』二四号.